

釧路湿原南部地域におけるオオジシギの生息状況について

黒澤 信道¹、貞國 利夫^{1,2}

はじめに

釧路湿原の南部地域において、2023年にオオジシギの個体数調査を行なった。対象地域を三次メッシュに従い208区画に分け、繁殖期にディスプレイ飛行などで確認できた個体数をまとめたところ、全域で261羽を確認した。同様の個体数調査はこれまで行なわれたことがなく、生息地の保全などの基礎資料になるものである。

背景

オオジシギ *Gallinago hardwickii* は、環境省のレッドリストで準絶滅危惧種 (NT) に指定されている (環境省2020)。繁殖地は世界的に見てもほぼ日本に限られ、それも北海道が主な繁殖地となっている (河井大輔ほか2003)。越冬地はオーストラリアで、長距離の渡りをする鳥類として注目されているが、釧路地域では珍しい鳥とは言えないことから、生息状況の調査はあまり進んでいない。

しかし (公財) 日本野鳥の会によれば、2017年に苫小牧市の西に位置する勇払原野西部で行なった調査で77羽を確認し、環境の変化が大きい場所もあるためか、同地域で2001年に行なった結果の107羽と比較して個体数がおよそ30%減少したと報告された (日本野鳥の会2017)。このように、地域では普通の種とみなされている鳥も、気づかないうちに減少傾向にあることが考えられる。これらの状況もありIUCN レッドリストでは、急激に個体数が減少したという理由で2022年、カテゴリーが低懸念 (LC) から準絶滅危惧種 (NT) にランクアップされ、近年は世界的にその生息が非常に危ぶまれている (IUCN2022)。

一方で、自然エネルギーの活用が推進されていることから太陽光発電施設が増え、釧路湿原南部の平坦地ではメガソーラーと呼ばれる大規模な太陽光発電施設が造られ、また計画もされている。これに危機感を持った釧路自然保護協会など地元の環境保護団体が、2023年3月に釧路市長に対して「釧路湿原周辺における太陽光発電事業に関する意見および再生可能エネルギーと地域共生のための実効性のある釧路市条例の制定に向けた要望」を提出している。この中で生息が脅かされる可能性のある希少動物種としてタンチョウやキタサンショウウオなどオオジシギを含む6種が列挙されているところ、オオジシギ以外の種に関しては当該地域での生息状況がある程度把握されているが、本種に関しては調査報告がごく少なく、全域での分布と個体数の調査は近年行なわれたことがない。

このため日本野鳥の会釧路支部が中心となり、当該地域

での生息の現況を明らかにしたいと考え、本調査を行なった。

調査方法

調査は2023年6月1日から6月29日までのオオジシギの繁殖期に行なった。釧路市 (旧釧路市のほぼ全域) と釧路町の一部、白糠町の一部を含む一帯を釧路湿原南部地域とした。この全域について、基準地域メッシュ (三次メッシュ: 約1キロ×1キロメートル、以下メッシュと言う) ごとに担当する調査員が、スポットセンサスまたはロードセンサスもしくは両方で、①ディスプレイ飛行②ディスプレイコール③個体の視認、により確認された個体数を記録した。各メッシュでの調査時間は、20分間を基本とした。同一メッシュで2回以上調査した場合には、最も多かった観察個体数をそのメッシュの値とした。大雨や強風などの悪天候は避け、オオジシギの行動が盛んになるとされる早朝 (夜明けから午前8時30分まで) の時間帯に調査を行なった。確認には、8倍程度の双眼鏡も使用した。なお、オオジシギのディスプレイは比較的発見しやすく、鳴き声も特徴的であるため、調査員が異なることによる発見数の差は少ないと想定される。

個体の確認調査と同時に生息環境把握のため、メッシュ内の主な植生を①草地・牧草地、②湿原・ヨシ原、③その他、に分けて記録した。

結果

調査した208メッシュのうち117メッシュでオオジシギが確認された。個体確認した総数は261羽であった。1メッシュの中で確認された個体数は、1羽のことが最も多く、次いで2羽であったが、オオジシギはこの時期には複数の個体が群れになって飛行することもあって、最大で14羽確認されたメッシュもあった。

各メッシュで確認された個体数を図1に示した。なお、湿原南部地域とされるうち、近づく道路のない湿原、丘陵地、および生息の可能性が少ない市街地などでは調査対象から除外したメッシュもある。

環境分類では、湿原・ヨシ原 (65メッシュ) でメッシュ当たりの個体数が一番多く、1メッシュ当たり平均2.0羽、ついで草地・牧草地 (73メッシュ) の1.6羽であった。その他 (70メッシュ) は林地、丘陵地、港湾、宅地などを含み、1メッシュ当たりの個体数は0.2羽と他の環境に比べて少なかった。

1 日本野鳥の会釧路支部、2 釧路市立博物館

集団が見られなくなり、同国のRDBカテゴリーがLC(低懸念)からVU(絶滅危惧Ⅱ類)に2ランク上がった(Stephan et al 2020)。北海道全域での推定個体数も、2018年に約35,000羽だったものが2020年には20,000羽へ減少し、2022年になっても個体数は回復していない(浦ほか2022)。釧路地域でもその影響を受け、地点によっては繁殖地としての環境変化が明らかでないにもかかわらず記録されなくなったという可能性もある。また市街地周辺では、以前は生息していたが、繁殖が成功しないことが続いて、結局その個体の寿命とともに生息が確認できなくなったという可能性がある。大楽毛周辺の地域では、自動車道の開設などの環境変化も理由として考えられる。また西部の牧草地帯については、圃場がきれいに整備されたり、デントコーンの圃場に改変されたりしたために生息にあまり適さなくなった可能性もある。

逆に2004年には確認できなかったものの、2023年に新たに確認されたメッシュは8カ所だった。主なメッシュは釧路西港から新大楽毛にかけて、また山花地区だった(図2)。前者では港湾の後背地が草地状態となって新たな生息適地になったこと、後者では牧草地が古くなったり放棄されたことにより生息に適するような草地になったことも可能性として考えられる。いずれにしても増減については、繁殖地の環境変化とともに、越冬地での状況が関係していると考えなければならない。

今回オオジシギの分布と個体数が実地調査で記録されたことで、これから時間の経過とともにどのような変化が見られるか、たいへん興味のあるところである。今回の調査は、本種の生息地保全のための重要な基礎資料になったと言える。

謝辞

今回の調査を実施するにあたり、日本野鳥の会釧路支部の会員有志ならびに関係団体の協力を得たことを、ここに深謝申し上げる。

調査従事者

黒澤信道、黒澤優子、貞國利夫、関根琢実、関根直美、高島優、永澤広治、樋田宏三郎、松本香、松本文雄、吉野智生、猛禽類医学研究所(大戸、沖山、尾里、清水、谷)

引用文献・資料

環境省. 2020. 環境省レッドリスト2020. 環境省公式HP
 河井大輔ほか. 2003. 北海道野鳥図鑑, P 337. 亜璃西社. 札幌
 日本野鳥の会. 2017. 野鳥2017年8月号, P 36. 日本野鳥の会. 東京
 IUCN. 2022. IUCNレッドリスト2022. IUCN日本委員会HP
 釧路市. 2004. 釧路市身近な指標生物市民調査「身近な生きもの野鳥調査」, P 23, 釧路市
 樋口広芳. 2016. 鳥ってすごい!, P 137. ヤマケイ新書. 東京
 日本野鳥の会. 2020. 野鳥2020年9-10月号, P 38. 日本野鳥の会. 東京
 Stephen T et al. 2020. The Action Plan for Australian Birds 2020, P 297-300. Csiro Publishing, Australia
 浦ほか. 2022. 日本鳥学会2022年度講演要旨集. P 131

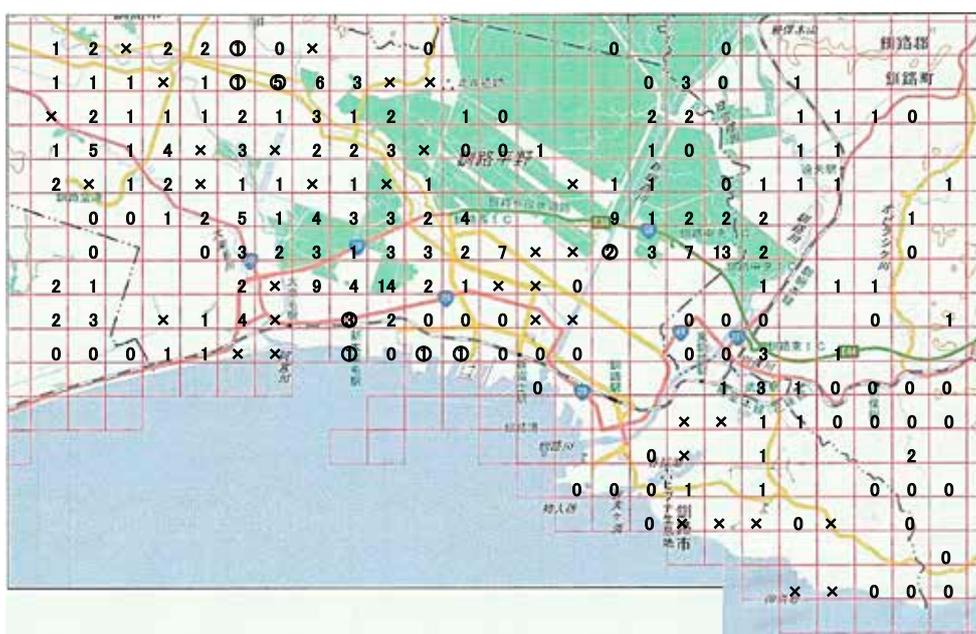


図2 新たに確認できたメッシュ (○) 確認できなくなったメッシュ (×)